

ライティング指導ツールのファイナルソリューション

- レポートで対話しよう -

奥田 麻衣[†] 石田 三樹[†] 越智 泰樹[‡]

[†] 広島大学大学院国際協力研究科 [‡] 広島大学社会科学研究所

E-mail: mai-o-mai@hiroshima-u.ac.jp

The final solution to teach report writing

-Let's communicate with students-

Mai OKUDA[†] Miki ISHIDA[†] Yasuki OCHI[‡]

あらまし

広島大学経済学部の石田教授の授業では 2002 年後期から従来型の対面授業を補完するものとして WebCT 導入し始めた。その効果的な運用を模索する中で Adobe システムズの ACROBAT が大いに役立った。本稿では ACROBAT の利用によって得られた学習効果の向上と残された課題について報告する。

キーワード：経済学 ACROBAT 効果的利用法 記述力の養成 学力向上

1. プロローグ

2000 年に開講された国際金融論の授業ではレポート、クイズ共に紙ベースでの出題であった。レポートとクイズがほぼ毎週交互に出題されており、250 人近い出席者の答案を整理するだけでも TA の労力は大変なものであった。クイズを回収し学籍番号順に並べ替えて採点をし、名簿に点数を記入してから間違いがないか再度確認してやっと学生に返却できる。採点期間の関係でクイズとレポートが一緒に手元にあることもしばしばで保管・整理にやたらと時間がかかっていた。レポートについてもせっかく提出してらったのだから次回のレポート作成に生かせるようなコメントを挿入するのが本当である。

しかし、提出する学生数が多いと一枚当りに費やすことのできる時間がどんどん短くなる。学生の満足度が高まり、授業の人气が上がってきて参加学生が増えてくると提供側の負担が高まりサービスの質が下がるというジレンマと戦っていた時期でもある。解決策として、10cm 四方のコメント一覧表を作り、該当箇所にチェックを入れてレポートにホッチキス止めをして学生に返却していた。これにより一枚一枚に書き込む手間が省け、一般的な注意事項は一覧表で促し個人に対応する必要があるものは添削をするというシステムができた。

表 1-紙ベースのメリット・デメリット

《メリット》	《デメリット》
(1) 手書きも含め作成を工夫する楽しみがある☆	(5) レポートの管理が大変で紛失の危険がある○
(2) レポート作成が PC 環境に左右されない☆	(6) 提出物の整理に時間がかかる○
(3) 提出されたレポートの紙面が読みやすい○	(7) 提出及び返却に時間を取られる☆○
(4) 提出及び返却時にコミュニケーションの機会がある☆○	(8) 返却できないケースが多い☆○
	(9) 返却すると再び参照することができない○

従来の紙ベースでのレポート提出におけるデメリットは WebCT を經由することによってほぼ解決することができた。特に提出されたレポートの管理にかかる時間は大幅に縮小された。しかし、紙ベースで提出することの良さが制限されてしまうことが WebCT を利用する際の懸念事項であった。PC の画面上でレポートを採点するよりも紙で提出されたレポートを採点する方がはるかに読みやすく、訂正やコメントの挿入なども容易である。この紙ベースで提出することの良さを生かしながら Web 経由のメリットの恩恵にも与る方法を生み出したことに本稿の意義があると考えている。

2. ターニングポイント

2002 年に開講された国際金融論では WebCT というコンテンツが導入された (WebCT 導入についての詳細は参考文献を参照されたし)。WebCT を利用することによって、クイズの採点が自動で行われ、成績の記入まで WebCT 上で出来るので作業時間の大幅な縮小に貢献した。為替レート予想クイズでは WebCT 上に提出された答案を為替レート順に並べ替えることも学生番号順に並べ替えることも簡単な操作で出来てしまう。徹夜で整理・採点をしていた頃と比べ作業効率が格段に良くなった。この頃から TA の主な業務はレポートの採点にしば

られてきた。レポートも WebCT を通して提出され、WebCT 上で採点をし返信をするので紙を整理する時間は必要なくなった。WebCT 上での採点も紙で提出されていた頃の経験を生かし、エクセルで採点項目を作成し、コピー&ペーストで学生のレポートにコメントを挿入しながら採点を行った。10cm 四方の紙を利用していただ頃と比べコメントはより詳細に準備できるようになったものの、誤字脱字や推敲を要する箇所など個々の中身についてのコメントが書き込めないことが課題であった。

3. インキュベーション

2007 年に開講された国際金融論のレポートでは、学生の記述力を向上させることに取り組んだ。400 字~600 字のレポートの構成力を付けるためには段落を意識して構成させる必要があると考え、従来の WebCT を利用してのレポート作成時にブロック分け出題を行った。コメントがどの部分を指しているのかを学生に対してより分かりやすく伝えることが出来るようになった。より分かりやすくはなったものの紙の答案を採点する際のように下線や取り消し線を引いたり誤字脱字を直接指摘したり書き込みを加えるといったやり取りをすることができず、もどかしさを感じていた。

4. ブレイクスルー

2007 年の国際金融論の最後のレポートで Adobe システムズの ACROBAT を使ったレポートシステムの構築を試みた。WebCT で行うレポートの採点では詳細なコメントを挿入することと該当箇所を特定することが課題であった。

図 1-ACROBAT を用いたレポートの例

ACROBAT を導入することによって、学生のレポートに下線やハイライトを入れることはもちろんのことコメントボックスでメッセージを挿入することもできる。採点のコメントもプルダウン形式で挿入できるので、従来のエクセルシートからのコピー&ペーストと比較して作業効率がアップした。手間が最小に抑えられる分、個々のレポートにより丁寧に採点をすることが出来るようになり学生へのフィードバックを的確に行うことが出来る。学生からは、提出したレポートに個別に対応された採点やコメントが付されて返却されるのはやりがいにつながるという感想が多く寄せられた。

表 2-ツバスシステム

	配布 回収 返却	管理	再利用	採点 コメント・詳細なコメント	減点 場所の特定
ツバス 紙ベース	○			△	○
ハマチ WebCT 初期	○	○	○	○	
メジロ WebCT 分割採点	○	○	○	○	△
ブリ Acrobat 導入	○	○	○	◎	◎

紙ベースから ACROBAT 利用までのレポートの進化の過程を上記の表 2 にまとめた。紙ベースのレポートの良さを損なうことなく、IT 化の恩恵を受けている様子が分かる。

5. エピローグ

従来のレポートとはアップロードに必要な手順が変更されているが、WebCT 上に提出マニュアルを載せたことと、授業でデモンストレーションをした効果で戸惑いを感じる学生はごく僅かであった。採点者にとっても、WebCT のみを利用していただ頃と比較して採点時間がさらに短縮された。

学生の学習意欲を高め、学習成果を向上させるための道具として WebCT と ACROBAT のシナジー効果は十分期待できる。今後はこの 2 つを利用しながら「何を」求めて「どんな」成果が挙げられるのかを問い続ける必要がある。

また、ACROBAT を利用したこのレポートシステムは WebCT と組み合わせることで大きな力を発揮しているが、WebCT を介さなくても活用可能である。

＜参考文献＞

- [1] 石田三樹, 越智泰樹: “経済学講義への WebCT の体系的導入”, 教育システム情報学会誌 (2005)
- [2] 梶田将司: “WebCT の現状と高等教育用情報基盤の今後”, <http://webct.media.nagoya-u.ac.jp/> (2001)